

臨床心理士養成大学院における修了生による スーパーヴィジョンシステムの検討

田口 香代子・木村 あやの

Supervision of a graduate course for clinical psychology by the alumni

Kayoko TAGUCHI and Ayano KIMURA

A graduate student and the alumni conducted a questionnaire survey to evaluate the supervision of a clinical psychology practical that was conducted by the alumni of a graduate school. The results were as follows: (1) Graduate students expected advice on clinical techniques and methods, as well as active supervision. (2) Graduate students felt that the alumni were friendly and relaxing and that the alumni were models for their future. (3) The alumni conducted effective supervision that met the expectations of graduate students. (4) The alumni were motivated to participate in the program to support younger students and for personal reasons. (5) The alumni experienced self-development through participation. It is concluded that this program resulted in the development of graduate student's skills, as well as in the professional development of the alumni.

Key words : graduate programs in clinical psychologist (臨床心理士養成),
supervision (スーパーヴィジョン), alumni (修了生),

はじめに

昭和女子大学生生活機構研究科心理学専攻臨床心理学講座(以下、本講座とする)は、財団法人臨床心理士資格認定協会の指定大学院第一種に認定されており、大学院生(以下、院生とする)は、指定制度のカリキュラムに基づいた授業を通して、心の専門家としての基礎的知識を習得すると同時に、実習による実践的なトレーニングを受けている。日本臨床心理士資格認定協会は、「臨床心理士」受験資格に関する大学院指定運用内規のなかで、「臨床実習」は学内外の施設において、実際に「受理面接」「心理査定」「心理面接」などを行い、ケースカンファランス、スーパーヴィジョンなどを含むものとする(財団法人日本臨床心理士資格認定協会, 2009)と規定しており、システムティックな実習の実施が重視されている。

なかでも、スーパーヴィジョン(以下、SVとする)については、近年、そのあり方について議

論が盛んになってきている。平成21年度の日本臨床心理士養成大学院協議会第9回大会分科会では「スーパーヴィジョンのあり方」がテーマとして取り上げられるなど(江口, 2010; 米倉, 2010)、指定校においてSVをどのように実施するかという問題が重要視されている。

一般的に指定校におけるSVは、学内の専任教員が行う場合と、外部の専門家に依頼する場合とに分けられる。学内の専任教員がSVを行うことについて、小早川(2006)は、院生側にすると、スーパーヴァイザー(以下、ヴァイザーとする)と対等な契約関係で、自由な雰囲気の中で学ぶというより、教員の指導を仰ぐという姿勢になりやすいことや、学業成績評価や日ごろの人物評価に影響するのではないかという懸念がでてくと指摘している。このような理由から、外部の専門家にSVを依頼することには利点があるが、一方では、院生の数に見合ったヴァイザーの確保の問題も抱えている。また、大学のオリエンテーショ

ンとはあまりにも異なるオリエンテーションを持ったヴァイザーを選ぶと、ヴァイザーが引き裂かれてしまう（一丸, 2003）ため、どのような人に依頼するかという問題もある。こうした問題点を解消するため、本学では、平成20年度まで、院生のSVは臨床心理士資格を有する学内専任教員（以下、教員とする）と、大学院附属の生活心理研究所心理臨床相談室（以下、相談室とする）専任カウンセラーが担当していたが、平成21年度より、本講座修了生（以下、OG/OBとする）による在籍生へのSV制度（以下、OG/OB SV制度とする）が始まり、院生の力量形成を目的とするとともにOG/OBにとっても専門性向上の一助になることを目指してきた。臨床現場で経験を積んできている数多くのOG/OBは本学の人的資源といえ、人物についても既知であるため、人数の確保やオリエンテーションの問題が解消されやすい。また、特徴として、OG/OBによるSVは広義には外部の専門家によるSVといえるが、ヴァイザーとスーパーヴァイザー（以下、ヴァイザーとする）は同じ大学院の先輩と後輩であることから、両者の距離は心理的に近いと考えられる。すなわち、OG/OBによるSVは、学内の専任教員によるSVと、学外の専門家によるSVの中間に位置する、既存のスタイルの中間的な存在であると考えられる。

以上のような経緯を経て、本学では、平成21年度からOG/OBによる在籍生へのSVについて大学の予算申請が認められ、OG/OB SV制度が始まった。本論文では、本学の臨床心理士養成システムにおけるOG/OB SV制度の位置づけについて

まとめるとともに、平成21年度・22年度にOG/OBからSVを受けた院生とSVを担当したOG/OBを対象に実施した調査をもとに、本学独自のOG/OB SV制度のシステムおよびOG/OBがSVを行うことの意義や問題点について検証し、システムの充実に必要とされることについて検討する。

1 本学におけるOG/OB SV制度の概要

1.1 本学における実習内容とOG/OB SV制度の位置づけ

本学の実習は、Table 1に示すように、必修授業として行う臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱ（修士課程1年次）と臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ（修士課程2年次）、外部実習、内部実習の3種類から構成されている（昭和女子大学生生活機構研究科心理学専攻臨床心理学講座, 2010）。このうち外部実習については、1年次4月より外部実習を経験し始め、2年次進級時には実習先を変えて、在籍中に異なる2機関で外部実習できるように配慮するなど、臨床心理士養成の仕組みを整えてきた（鶴養他, 2010）。また、本学の相談室は1995年の開室以来、子どもと女性の相談室として地域に根付いてきており、院生の担当ケース数も確保できるようになってきている（田口・佐藤, 2009）。

臨床心理面接の実習としては、①院生同士によるロールプレイ（20分1回）②他大学院との連携により他大学院生との間で実施する試行カウンセリング ③相談室でのケース担当という3段階の実習を行っている（鶴養他, 2010）。さらに、③のケース担当をする前に院生は、子守り、撮影係

Table 1 大学院生の実習内容とOG/OB SVの開始時期

実習の種類別	修士課程1年次			修士課程2年次	
	前期	夏期休暇	後期	前期	後期
臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱ ／臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ	ロールプレイの検討 (臨床心理基礎実習Ⅰ)		ケースカンファランス(GSV) ¹⁾ (臨床心理基礎実習Ⅱ)	(臨床心理実習Ⅰ)	(臨床心理実習Ⅱ)
外部実習	1年間の医療機関実習を含む外部機関実習				
内部実習	試行カウンセリング		ケースの子守り 撮影係り インターク陪席 ↓	1ケース目の担当 → 2ケース目の担当・OG/OB SVの開始	

1) GSVはグループスーパーヴィジョン

り、インターク陪席などを担当し、ケースに触れる機会をもっている。子守りとは、本学附属の相談室に来室するクライアントは子育て世代も多く、乳幼児を連れて来室する場合があり、その際の面接時間中に院生がクライアントの子どもを預かるものである。日頃、乳幼児に接する機会のない院生にとって、貴重な関わりの一つと考えられる。また、撮影係りとは、先輩院生が担当するプレイセラピーの様子をDVD撮影するものである。実際にケースを担当する前に間近でプレイセラピーの様子を見る機会を得られるため、院生のケースを持つことへの不安を軽減させる効果があると考えている。インターク陪席は、当相談室では経験の豊富な臨床心理士である専任カウンセラーがインタークを行っており、その際にクライアントの了承が得られた場合に院生が陪席し、記録をまとめることとしている。このような体験を通し、実習のための準備が整った者から相談室でケースを担当することになっている。また、心理臨床面接と並び、臨床心理士の重要な業務である心理検査についても、院生が内部実習として担当している。特に本学では、ウエクスラー式知能検査について、クライアントにとって有益な支援を行いつつ、院生にとっても実践的な臨床経験ができるシステムを構築し、検査の実施・活用の専門性を育成することを目指している（佐藤・木村・藤崎, 2010）。

臨床心理士養成において、実習に対するSVは専門家としてのトレーニングのための重要な機会である。本学のSV体制は、個別SVと、授業のなかでのグループスーパーヴィジョン（以下、GSVとする）から構成される。まず個別SVは、ケースごとに異なるヴァイザーが実施する。これは、初学者のうちに院生がさまざまな臨床の視点を偏りなく学べるように、との配慮からである。原則として1つ目のケースでは教員がSVを担当し、2ケース目からはOG/OBにお願いする。院生は、相談室のケースを担当する際、必ず毎回のケースの後に個別SVを受ける。これは、他大学院生との間で実施する試行カウンセリングの場合も同様である。院生はケース担当が決まった場合、インタークの情報をもとにケースを始める事前のSV（以下、事前SVとする）をヴァイザーから受け、その後は、ケース毎にSVを受ける。SV

を担当する教員は、院生のゼミの担当者以外の教員になるよう配慮している。一方、臨床心理基礎実習Ⅱ（修士課程1年次後期）、臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ（修士課程2年次前後期）の授業において、GSVが実施される。GSVでは、事例提供者の個別SV担当者以外の教員がファシリテーターとして参加する。先述したとおり、本学はさまざまな臨床の視点を偏りなく学ぶ、という観点をもつため、個別SVに加え、GSVにおいて担当するケースの事例提供をし、ケースについて多面的に検討する機会を設けている。以上のように、院生が段階を踏んで臨床心理面接の技量を向上できるような体制づくりをしており、1ケース目担当終了までには、院生が臨床心理面接の最低限の様相を体験できるようにしている。このような背景のもと、2ケース目以降を担当することになった院生のSVをOG/OBに依頼する制度が、OG/OB SV制度である。

1.2 OG/OB SV制度の実際

－SV登録からケースが依頼されるまで－

1.2.1 OG/OB SV制度登録手続き

平成21年度には6名のOG/OBが登録し、うち4名が実際にSVを担当した。平成22年度は6名のOG/OBが登録し、うち5名がSVを担当している。平成21年度から継続して登録しているOG/OBは4名であった。1人のヴァイザーにつき、概ね1ケースから3ケースのSVを担当している。

OG/OB SV制度への登録の実際について、平成22年度の実績をもとに報告する。OG/OB SVは、4月から翌年3月までの1年登録制をとっている（Table 2）。そのため、登録前年度の3月に、生活心理研究所からOG/OB（旧、生活文化研究専攻心理学講座臨床心理士養成コース修了生を含む）に対し、OG/OB SVの活動概要（Table 3）と、登録のお願いを発信した。登録希望者は、3月末日までに生活心理研究所に履歴書を送付し、登録希望のあったOG/OBについて、生活心理研究所運営委員会において審議がなされ、4月に正式な登録者として決定される。前年度から継続して登録する場合も、新たに履歴書の送付をお願いしている。

本講座は、平成12年度より財団法人臨床心理士資格認定協会の臨床心理士資格審査規定に基づ

Table 2 OG/OB SV登録者の1年の流れ

年・月	事柄
平成22年3月	OGSV登録募集開始・登録希望者履歴書提出
平成22年4月	生活心理研究所心理臨床相談室カンファランスにて登録者決定
平成22年5月	OGSV説明会の実施
	SV担当
平成23年3月	登録終了（「SV担当証明書」の発行）

Table 3 OG/OB SVの活動概要

仕事内容	臨床心理学講座院生の学内ケースのSV(原則、プレイもしくはカウンセリング実施の度に)。各院生の1ケース目は、原則教員が担当するため、2ケース目以降のSVを担当する。
身 分	外部講師(非常勤講師ではない。大学の雇用ではないので、在職証明は発行できない。そのため職歴とはならないが、特記事項、あるいは社会的貢献などには該当する。実際にSVを担当したら、「SV担当証明書」を心理学専攻主任と生活心理研究所所長名の連名で、年度末に発行する。また、登録をした場合、年1回発刊される生活心理研究所紀要の活動報告に名前が掲載される。)
報 酬	1回1時間程度のSVで10,000円(交通費込み)
SV場所	生活心理研究所内の面接室
実施曜日・時間帯	火曜日から土曜日(生活心理研究所開室日)、9時から17時30分
資 格	臨床心理士有資格者で資格取得後5年以上経過した方(1回更新が済んだ方)
登録期間	1年(毎年、年度初めに新規・継続ともに、登録作業・確認作業を行う)
説明会	登録者を対象に、後日説明会(1時間半程度)を実施する
その 他	登録者全員が必ずSVを担当するとは限らない。ケース特徴に合致する専門性、ケース担当院生とSVを実施できる日程調整が可能なこと、生活心理研究所にケースが多数来て院生が2ケース目の担当が必要となること、などの条件が満たされることが必要。

く、指定大学院第一種として認定を受けている。大学院第一期生は資格取得後10年を経過しており、臨床心理士資格の2回目の更新を修了している。Table 3のとおり、OG/OB SVの活動は、相談室で担当したケースのSVが仕事であり、臨床心理士としての実務経験が不可欠である。そのため、OG/OB SV制度への応募条件として、臨床心理士資格取得後5年以上(1回更新以上)経過していることを取り決めている。

1.2.2 OG/OB SV説明会

平成22年度はOG/OB SV登録者に対して5月に説明会を実施した。参加者は、登録者3名、教員8名、相談室専任カウンセラー1名、相談室相談事務1名の、計13名であった。この説明会は、①教員との顔合わせ ②大学院の実習体制と相談

室の概要に関する説明 ③OG/OB SV制度についての説明の他、④すでに平成21年度にヴァイザーとして活動したOG/OBから気づいた点や疑問点について挙がり、教員や専任カウンセラーとの意見交換もなされた。②③については生活心理研究所所長から説明がなされた。

②については、OG/OBが在籍していた頃とは、実習内容や担当教員が変わっていることも多いため、実習に関する注意事項などがまとめられている、平成22年度臨床心理学講座実習必携をOG/OBに1人1冊ずつ配布し、現在院生がどのような臨床実習を経験しているのか、理解が進むように説明した。③については、SVを担当するにあたってのOG/OBへのお願いとして、次の3点を説明し、同意が得られた場合、署名を求めた。第

一には、守秘義務として、SV中に知り得た事項に関して、外部に漏らすことのないように求めた。第二に、記録管理について、ヴァイザー用の記録も含めて生活心理研究所で保管しているため、SV終了後は、院生に記録を預けて持ち帰らないことを求めた。第三に、SVは生活心理研究所の開室時間内に生活心理研究所で実施することを求めた。具体的には、日時は院生と直接連絡を取って決めることになり、当日の急な変更についても院生に連絡することを伝えた。この件については平成21年度にSVを実施したOG/OBから、仕事の都合もあり夜間帯のSV実施を希望する声が上がった。しかし、スタッフの雇用の面などから、最終でも18時に閉室できるように現在もご協力いただいている。また、大学内の施設のため、大学の長期休暇中などには生活心理研究所に入れない場合もあり、SVの日時を決める際に難しさがあったことが報告された。このことを改善するために、来年度から説明会の際に年間の学事日程をOG/OBに伝えることを検討している。

意見交換の場では、親子並行面接の子担当のSVになった場合、親面接の情報をどのように共有していくか、また、担当ケースを院生が授業のGSVに出した場合に授業担当者との連携が取りづらいことなどが挙げられた。また、院生がどのようなことに関心があるのか、以前どのようなケースを担当したことがあるのか、などの院生の情報が予めわかっているならば、より有意義な時間を過ごせるのではないかと、との意見が挙がり、これ

らの情報をまとめられる「SVシート」を新たに作成した。だが、SV担当者によっては、これまでの院生の情報を予め必要としない、と考える場合もあるため、SV担当者に確認してから利用がなされている。OG/OB SVはまだ立ち上がったばかりのシステムであるため、今後も年に一度この説明会を実施し、登録者にOG/OB制度の理念や仕組みについて理解を求めるとともに、よりよい制度になるよう、学内教員とOG/OBとが意見交換できる場にしていきたい。また、残念ながら説明会に参加できなかった登録者については、後日資料を配布し、個別に対応した。

1.3 OG/OB SV制度の実際

ーケース依頼から受け持ちまでー

1.3.1 ケースの依頼

新規にOG/OB制度に登録した場合、5月の説明会を経た頃から、SV担当の依頼が始まる。OG/OB SV制度登録者が実際にSVを担当するまでの流れについて説明する (Figure 1)。相談室に予約の入ったケースは、臨床心理士である専任カウンセラーがインテークを行う。このインテークには院生が陪席する。インテークで得られた情報をもとに、専任カウンセラーと、教員8名の計9名で構成される週1回のカンファランスにおいて、当相談室でカウンセリングを受理するか、あるいはクライアントにより適した機関にリファーするか、検討を行う。このカンファランスでケースを担当する院生について検討するとともに、院生の

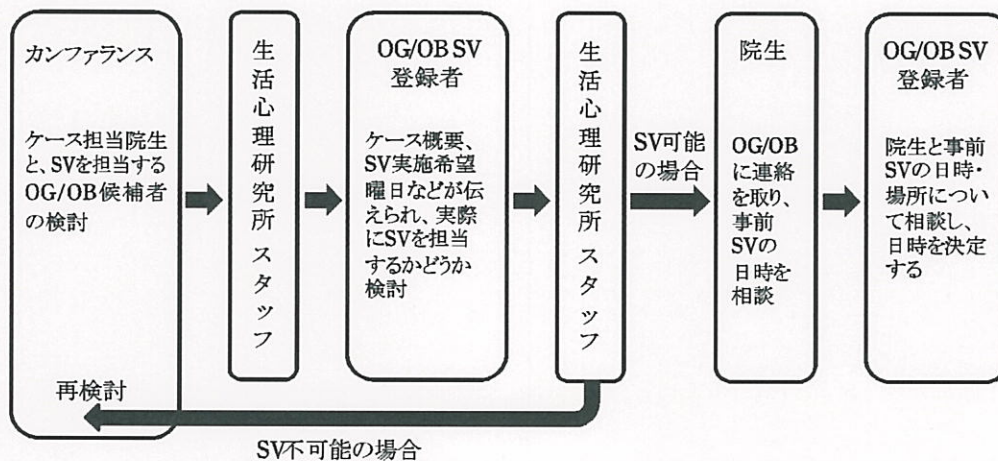


Figure 1 登録者がSVを担当するまでの流れ

SV担当者も同時に検討される。先述したとおり、1ケース目は、院生にとってイニシャルケースとなるため、教員がSVを担当する。ケースを担当する院生が、2ケース目以降である場合、OG/OBにSVを依頼する。依頼にあたっては、OG/OBのSVが可能な曜日・時間帯と院生の授業や外部実習曜日との兼ね合い、また、OG/OBに登録の際に履歴書への記載を求めた、SVが可能な事例の特徴と、ケースの特徴が合致するかどうか、等について考慮される。本学では院生側がOG/OBを選択するという方法は取っていない。これは、教員によるSVについても同様である。

カンファランスで検討されたSV担当候補者のOG/OBに生活心理研究所から連絡が入り、実際にSVを担当するか否かを候補者が決めることになる。ケースの概要、SV実施予定曜日などについて知らされるため、候補者はこれらの情報から、自身がSVを担当するかどうか決める。連絡を受けたOG/OBは、必ずそのケースのSVを引き受ける必要がなく、その時の自身の状況等により、別の機会にすることも可能である。SVを担当してもよい、ということになれば、その旨を生活心理研究所スタッフに伝える。連絡を受けたスタッフは、ケースを担当する院生に、ヴァイザーがOG/OBになったことと、OG/OBから承諾を得た連絡先を伝える。院生は、伝えられた連絡先に問い合わせ、ケースの事前SVの予定を担当のOG/OBと直接に相談して決める。SVの場所は院生が生活心理研究所の開室時間をあらかじめ確認しておき、ヴァイザーとの予定が決まったら、生活心理研究所で場所の予約を行う。こうして院生とOG/OBが初めて顔を合わせる事前SVが始まる。

また、OG/OBの勤務先などについての情報の詳細は院生には伝えず、「現場で活躍している先輩である」ということのみを共通して伝えている。教員についても経歴などの詳細は進んで伝えていないため、各OG/OBの判断で自分の経歴などについては説明してもらうこととしている。

1.3.2 SVの実際

院生は、実習必修資料「SVの受け方」(昭和女子大学生生活機構研究科臨床心理学講座、2010:資料1)に従い、SVの準備を整える。事前SVの際

に、院生はインテークの情報をもとに、自分なりの見立てや疑問をA4用紙1枚程度にまとめておくことになっている。また、先述した「SVシート」を利用する場合もある。ケースが実際に始まったら、1回のケース終了後に院生から担当のOG/OBに連絡が入るようにし、次回のSV日時を決める、という流れになる。また、毎回のケース後のSVだけでなく、数回経過した後の中間や、ケース終了あるいは中断後に、ケースを整理する「まとめのSV」を実施する場合もある。

SVには、院生が逐語記録を作成して持参する。クライアントが大人のケースの場合、了承を得たうえで言語のやりとりをICレコーダーに録音しているので、その音声データもSVで使用する。クライアントが子どものプレイセラピーの場合は、了承を得たうえでセラピーの様子を撮影しているため、その画像もSVで役立てられている。このような音声や録画データの再生に必要な機器は、院生が準備をしておくことになっている。だがヴァイザーにより、SVの方法も異なるため、SVで使用する物については、適宜ヴァイザーによる院生への指導を求めている。また、親子並行面接の場合は、OG/OBが生活心理研究所に入室した際に、親担当の臨床心理士と情報共有することもできる。1回あたりのSV時間は、当初1時間を想定していたが、実際にヴァイザーを担当したOG/OBからは1時間では時間が足りないとの指摘があり、1.5～2時間程度であることが多い。

2 本学におけるOG/OB SVシステムの検証 一質問紙調査の結果から一

OG/OB SVシステムの立ち上げから2年目を迎えたことから、システムの機能、OG/OBがSVを行うことの意義および問題点について検証し、より充実したシステムづくりに役立てることを目的に質問紙調査を実施した。また、OG/OBによるSVのシステムティックな実施は、他の大学院では前例がないと思われ、システムの検討は意義あることと考えられる。

2.1 調査対象者・手続き

平成21年度・22年度にヴァイザーとなった院生12名(全て女性)と、ヴァイザーとなったOG/

OB7名(全て女性)に調査への協力を依頼した。調査は2010年8月に実施し、質問紙の配布・回収はメール添付により行った。なお、院生については、質問紙を配布する際、調査が必修授業である臨床心理基礎実習・臨床心理実習の成績評価に反映されることは一切ないことを明記し、配慮した。最終的に、ヴァイジーとなった院生11名、ヴァイザーとなったOG/OB6名から有効回答を得た。

2.2 調査内容

ヴァイジーについては、①初めてOG/OB SVを受ける前の不安やSVへの期待、②どのようにSVに臨もうと思ったか、③実際どのように取り組んだか、④実際にSVを受けて感じたこと、⑤勉強になったこと、⑥OG/OBからSVを受けることについてどう思うか、⑦連絡の取り方やケースを進める上で困ったことはあったかなど、主にSVの事前事後に関する質問について、選択式または自由記述にて回答を求めた。

ヴァイザーについては、①ヴァイザーとして登録しようと思った理由、②初めてSVを担当する前の不安やSVに対する自己効力感、③実際にSVを担当してみて感じたこと、④学んだこと、⑤OG/OB SVでのヴァイザー経験は自身の臨床経験にとってどのような意味があるか、⑥現場にいるOG/OBが大学院の後輩のSVをすることについてどう思うかなど、ヴァイジーの場合と同様に、主にSVの事前事後に関する質問について選択式または自由記述にて回答を求めた。

2.3 結果

得られた結果は、SV実施前のヴァイジーとヴァイザーの意識、SVに対するヴァイジーの意識、SVに対するヴァイザーの意識、OG/OBがヴァイザーであることに対する意識、実施上の問題点の5点から整理した。なお、文中において、質問項目は『 』、自由記述からの抜粋は〈 〉、結果の分類カテゴリーは「 」で示した。

2.3.1 OG/OB SV実施前のヴァイジーとヴァイザーの意識

まず初めに、ヴァイジーとヴァイザーそれぞれのSV実施前の意識について整理した。

(1) ヴァイザーの登録理由とSV実施前の気持ち

OG/OBがOG/OB SV制度に登録した理由をTable 4に示した。6名のうち5名が『後輩の力になりたい』、4名が『ヴァイザー経験が自身の学びになると思ったから』という理由について、あてはまると回答しており、どちらかといえばあてはまると回答した者を含めると、6名全員に登録の動機として後輩の支援や自身の学びという積極的な意思があることが分かった。『自分の臨床経験を生かせると思ったから』については、6名のうち5名があてはまる・どちらかといえばあてはまると回答しており、自身の臨床心理士としての能力に、ある程度の自信を持つことができていることがうかがえた。『教員という立場ではない外部の臨床心理士が院生のSVをすることに意味があると思ったから』については、ほぼ登録の動機になっていなかった。また、その他の理由がある場合に自由記述を求めた結果、〈自由に動ける時

Table 4 OG/OB SV制度への登録理由

項目	あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
修了生として、後輩の力になりたいと思ったから	0	0	1	5
スーパーヴァイザー経験が自分自身の学びになると思ったから	0	0	2	4
今までの自分の臨床経験を生かせると思ったから	0	1	3	2
院生が所属する大学院の教員という立場ではない臨床心理士が、院生のSVをすることに意味があると思ったから	1	4	0	1

間があるから)、〈子育て中のため、時間的に融通がきくから〉という回答が得られ、特に育児中や非常勤勤務のOG/OBにとって登録しやすい制度であると考えられる。

SVを実施する前のヴァイザーの気持ち (Table 5) では、4名が、ヴァイザーとしてヴァイジーの力になれるかということについて不安を感じていた。その一方で『後輩の力になれると思う』については6名全員が可能と考え、院生への情緒的サポートおよび臨床的アドバイスができると思うかという質問には、6名のうち4名が、どちらかといえばあてはまると回答しており、具体的な指導内容にはある程度の自信があることがうかがえた。なお、調査時にOG/OB SV制度以外でヴァイザー経験をもつ者は2名のみであり、4名については初のヴァイジー経験となったことや、母校であるとはいえ、ヴァイジー全員にとっては新規のシステムでSVを行うため、具体的な指導にはある程度の自信をもちながらも、ヴァイジーとしての役割遂行に不安が生じた可能性があると考えられる。

(2) SV実施前のヴァイジーの気持ち

初めてOG/OB SVを受けることが決まった時のヴァイジーの気持ちをTable 6に示した。臨床的技法のアドバイスへの期待については11名のうち8名があてはまると回答し、最も期待が高いことが分かった。一方、同じ指導内容に関することながらであっても情緒的サポートへの期待について、あてはまると回答した者は1名にとどまり、どちらかといえばあてはまると回答した者を合わせると全体の半数は超すものの、SVに対する期待は臨床的技法の指導に比重がおかれていることが分かった。また、初対面であることへの不安があると回答した者は1名にとどまり、全体として不安は高くはないものの、どちらかといえばあてはまると回答した者を合わせると、4名に不安が存在していた。しかし、全体の半数を超える6名が臨床心理士である先輩に会えることを楽しみだと感じ、先輩への安心感についても、10名があてはまる・どちらかといえばあてはまると回答していた。つまり、初対面の人にSVを受ける不安がある者もいるが、ヴァイザーに会うことは楽しみ

Table 5 OG/OB SV実施前のヴァイザーの気持ち

項目	あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
スーパーヴァイザーとしてスーパーヴァイジーの力になれるか心配だ	0	1	1	4
修了生として、後輩の力になれると思う	0	0	6	0
院生への情緒的なサポートができると思う	0	2	4	0
院生へ臨床的技法のアドバイスができると思う	0	1	4	0

Table 6 OG/OB SV実施前のヴァイジーの気持ち

項目	あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
臨床的技法についてアドバイスしてもらえそう	0	1	3	8
臨床心理士として働いている先輩と会えるのは楽しみだ	0	1	4	6
同じ大学院を修了した先輩なので安心感がある	0	1	7	3
情緒的にサポートしてもらえそう	1	4	5	1
会ったことのない人なので心配だ	5	2	3	1

であり、自分達の先輩であることに安心感をもつ者が多かったといえる。

2.3.2 SVに対するヴァイジーの意識

次に、SV実施前と実施後の各段階においてヴァイジーがSVを受ける姿勢を整理した。自由記述による回答は、全員分の回答を概観し、内容に共通性があるものをカテゴリー化してラベリングを行った。1名分の回答に複数の内容が含まれている場合は、内容別に分けて整理した。回答のカテゴリー化およびラベリングは第1著者と第2著者の2名で行った。

(1) どのようにSVを受けようと考えたか

SV開始前のヴァイジーがSVを受ける姿勢について、『外部の教員ではないOG/OBからSVを受けることになり、どのようにSVを受けようと考えましたか』という質問をした。自由記述による回答を整理したものがTable 7である。結果から「SVの受け方」、「現場における視点への期待」という2つの側面が抽出された。さらに、SVの受け方は①「事前準備」、②「変化なし」、③「関係構築」に分かれていた。SV実施前のヴァイジーは、ヴァイザーが内部の教員であろうとOG/OBであろうとSVに臨む姿勢や心構えに変わりはなく、内部教員から受けたSV経験をもとに、ケースの見立てや情報整理をするなど、ケースの内容に関する事前準備をしようとしていた。また、ヴァイジーと関係を築き、現場における視点を学

びたいと考えており、全体として積極的な姿勢があることが分かった。

(2) 実際の取り組み

SV実施後のヴァイジーがSVを受ける姿勢について、『外部の教員ではない、OG/OBからのSVにどのように取り組みましたか』という質問をした。自由記述による回答を整理したものがTable 8である。結果から「SVの受け方」、「現場における視点の学び」という2つの側面が抽出された。これらの側面はSV実施前の姿勢と同様の結果であるが、SV実施前にみられた「現場における視点への期待」は、SVを通して実際に、「現場における視点の学び」になっていた。さらに「SVの受け方」は①「事前準備」、②「変化なし」、③「その他」に分かれ、SV実施前にみられた「関係構築」はみられなかった。また、①では内容に変化がみられ、ケースの中身に関する準備に加えて、報告の仕方に関する工夫が見受けられ、より合理的にSVを受けようとする姿勢がうかがえた。③では、ヴァイザーには時間を都合して大学に来てもらっているという思いが述べられ、時間を無駄にしないような心がけの他、早めに連絡をとるなど、ヴァイザーが外部の者であることへの配慮がうかがえた。実際にSVが始まり、実施前にみられた積極的な姿勢は、実際の具体的な取り組みに反映されていた。

(3) SVを受けてみて感じたこと

ヴァイジーが実際にOG/OB SVを受けて感じた

Table 7 ヴァイジーがSVを受ける姿勢 (SV実施前)

カテゴリー	記述内容	
SVの受け方	変化なし	OG/OBの先生ということでSVの受け方が変わることはないが、先輩なので安心感はある／ヴァイザーが卒業生ということはあまり意識しなかったが、先輩という安心感はある／心構えは院の先生方から受けるSVと特に変わらない／内部の先生によるSVと同様に臨む
	事前準備	内部の教員から以前にSVを受けたときの反省点を生かす／頻繁に会える環境にないため、問題や質問を明確にしてSVを受ける／ケースの見立てをし、疑問点を明確にして臨む／情報の整理や自分なりの見立てを立てておく等、事前準備をする／積極的に質問をしようと思った／下準備をする
	関係構築	失礼のないようにSVを受ける／SVの先生のやり方に合わせる／検討事項をOGに共有してもらえようように話すことを心がける
現場における視点への期待	現場での方法・やり方と生活心理研究所でのやり方の違いについてSVを受けたい／現場の臨床経験を参考にしたい	

Table 8 ヴァイジーがSVを受ける姿勢 (SV実施後)

カテゴリー	記述内容	
SVの受け方	変化なし	外部の、教員ではないOG/OBからのSVという意識はなかった／大学院の先生にSVしていただく時と変わらない
	事前準備	<ケースの中身> ケースの概要や見立て、感想などを伝え、分からない点は質問したり、新たな視点などの指導を受けた／自分なりの考えと疑問点をもって臨んだ <報告の仕方> 先生によってSVのやり方は異なると思ったので、資料の作成の仕方やSV時の持ち物などを確認した／出来るだけ分かりやすい形にまとめる努力をした／ケースについて説明するために、A4の用紙に短くケースの概要や所見、疑問点などをまとめたものを作成した。録音した記録についてはきいて頂きたい箇所をあらかじめ考えておくようにした
	その他	時間を作って大学まで来て頂いているという思いを持ち、時間を無駄にしないようにしたいと思って取り組んだ／連絡を早めにとるようにした／自己紹介を書き、自分自身について知ってもらった
現場における視点の学びとり	臨床現場を持っているスーパーヴァイザーからのアドバイスや指摘を大切にしたいと思った／外部の臨床機関では実際にどのようなカウンセリングがしているのかなど、具体的な質問をした	

Table 9 SVを受けて感じたこと

項目	あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
自分が疑問に思ったことについて質問しやすかった	0	0	1	10
SVを受けることでケース理解ができた	0	0	2	9
臨床的技法のアドバイスをしてもらえたと思う	0	1	1	9
情緒的にサポートしてもらえたと思う	0	2	3	6
現場で臨床心理士として働いているOG/OBと直接会うことで、自分の将来について考えた	1	0	6	4
同じ大学院を修了した先輩なので安心感があった	0	2	6	3
SV以外では会わない人なので緊張した	5	2	2	2
内部の教員ではないので、甘えが許されなと思った	5	4	2	0

ことをTable 9に示した。11名のうち10名が、疑問に思ったことについて質問しやすかったと感じ、9名がケース理解ができたと回答していることから、ヴァイザーとヴァイジーの関係において問題なくSVが進められ、なおかつ効果的であったことがうかがえる。SV実施前に期待が高かつ

た臨床的技法についてのアドバイスがもらえたかという質問には、10名があてはまる・どちらかといえばあてはまると回答しており、期待に添ったSVが行われたことがうかがえる。情緒的サポートへの期待は、SV実施前の段階では臨床的技法のアドバイスよりも比重が低かったが、実際に

は、情緒的サポートをしてもらえたかについて、9名があてはまる・どちらかといえばあてはまると回答しており、期待した以上の効果を得られていることが示された。また、SVの内容だけではなく、OG/OBと会うことで自分の将来について考えたかという質問に、10名があてはまる・どちらかといえばあてはまると回答し、OG/OBとの出会いはヴァイザーのモデル形成に影響を与えていた。先輩という安心感があることについては9名があてはまる・どちらかといえばあてはまると回答しており、ほぼSV実施前と同様の心境であるといえる。ヴァイザーと初対面であることに緊張感をもつ者もいたが、先輩であることへの安心感をもちながら、実際のSVはスムーズかつ効果的に進められ、モデル形成にもつながる経験になったといえる。

(4) 勉強になった点

OG/OBからSVを受けて勉強になった点について、自由記述による回答を整理したものがTable 10である。結果から①「技法」、②「ケース理解」、③「自己理解」、④「モデル形成」という4つのカテゴリーが抽出された。①については、主に具体的・実践的であったことが勉強になった点としてあげられ、②では、クライアントの状態像や見立てに関する記述が多くみられた。また、自身のくせや新たな気づきがあったことなど、SVを通

して③も進んでおり、SVの基本的な機能が果たされていることがうかがえる。また、④では、臨床心理士としての態度や職業アイデンティティに通じる気づきもみられた。その他、ヴァイザーの気さくな人柄から、他では恥ずかしくて聞けないような些細な疑問も尋ねることができたといった記述もあり、OG/OBはヴァイザーにとって、より身近なモデルになっていると考えられる。

2.3.3 SVに対するヴァイザーの意識

(1) SVを実施して感じたこと

OG/OB SVを実施後のヴァイザーの気持ちをTable 11に示した。『院生への情緒的サポートができたと思う』、『後輩の力になれたと思う』については6名全員が、あてはまる・どちらかといえばあてはまると回答していたが、『ヴァイザーとしてヴァイジーの力になれたと思う』、『臨床的技法のアドバイスができたと思う』については、どちらかといえばあてはまるに回答した者が3名にとどまり、ヴァイザーとしての力量や技法に関する自信がもてない様子が見られた。『ケースの概要や気をつけることについて、院生と会う前に知りたかった』については、6名全員が、あてはまる・どちらかといえばあてはまると回答していたが、『院生がどのような人なのか事前に情報を知りたかった』については、あてはまる・どち

Table 10 OG/OBからSVを受けて勉強になった点

カテゴリー	記述内容
技法	SVが具体的・実践的だった／傾聴・共感など基本的な技法だけでなく、そのCIに何が必要かを学ぶことができた／抽象的な指示ではなく、具体的な文言を例にあげてのアドバイス／具体的な技法について教わることができた
ケース理解	見立てをする際の幅が広がった／CIの状態像の理解や見立てについて勉強になった／CIに関する理解ができた／CIの年代の人達がどのような課題を抱えやすいか学ぶことができた／CI理解の視点を幅広く学べた
自己理解	カウンセリングの進行においての自分自身の変化を捉えるきっかけになった／勉強不足な点が明らかになった／自分の特徴となる部分を指摘されて、自己理解に繋がった／自分のくせや苦手な部分についてアドバイスをもらった／自分自身についての新たな気づきを得られた
モデル形成	いつも笑顔で親身になって接してくれるヴァイザーが良き手本になった／現場での話やヴァイザーの自身の技術習得に至る過程を教えてもらうことで、面接に対する態度や言葉かけなどがより身近に実感して理解することができた／現場での話やカウンセリングに対する姿勢の話を聞き、自分は今までカウンセリングを学業の延長に捉えており、仕事という意識が足りないことに気づいた

注) CI: クライアント

Table 11 OG/OB SV実施後のヴァイザーの気持ち

項目	あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
院生への情緒的なサポートができたと思う	0	0	5	1
修了生として、後輩の力になれたと思う	0	0	6	0
スーパーヴァイザーとしてスーパーヴァイジーの力になれたと思う	0	3	3	0
院生へ臨床的技法のアドバイスができたと思う	0	2	3	0
どのようなケースなのか院生と会う前に予め概要や気をつけることを知りたかった	0	0	4	2
院生がどのような人なのか本人に会う前に情報が知りたかった	1	3	1	1

Table 12 ヴァイザー経験を通して学んだこと

カテゴリー	記述内容
a. ヴァイザーとしてのスキルに関すること	院生にとって有意義で役立つと考えることを、いかに役立つ形でニーズに沿って提示するか工夫／当日詳しい資料を読み、伝えることを伝えるためには自分の中にもっとたくさんの引出しが必要と感じた
b. 一臨床心理士としての気づき・学び	自らの臨床スタイルや興味・関心の方向性を再認識した／ケースに関わるスタッフとの連携の大切さ／異なる分野での相談室の相談のすすめ方やインテークのやり方／自分自身の臨床について振り返ったり、見直した
c. aとbの相互作用による学び	誰かに伝えるということは自分の理解にもつながる／これまでパイザーに学んだこと、現在学んでいることを少しでも後輩に伝えられればよいなと思っているが、思うよう伝えることはとても難しく、自分の中で深い理解をしていないと相手に届くように伝えることはできないと痛感した／スーパーヴィジョンの機能を果たしているか、ヴァイジーの良い面が生かされているかなど自己点検するようになり、自分の足りないところについて考えるようになった

らかといえばあてはまると回答した者は2名にとどまり、ヴァイザーはSVを実施するにあたり、ヴァイジーではなく、ケースそのものに重きを置いていることがうかがえた。

(2) ヴァイザー経験を通して学んだこと

院生へのSVを通してヴァイザーが学んだことについて、自由記述による回答を整理した結果をTable 12に示す。ヴァイザーの学びは、a「ヴァイザーとしてのスキルに関すること」、b「一臨床心理士としての気づき・学び」、c「aとbの相互作用による学び」(Figure 2)に分類された。また、ヴァイザー経験は自身の臨床経験にとってどのような意味があるか質問したところ、自己研鑽の場になっている、意識の向上に繋がる、もっ

と臨床経験を積む必要性を感じて仕事に対する意欲がわいた等の回答が得られた。これらのことから、ヴァイザー経験はOG/OBの臨床心理士としての成長に直接的に影響を及ぼしていると考えられる。

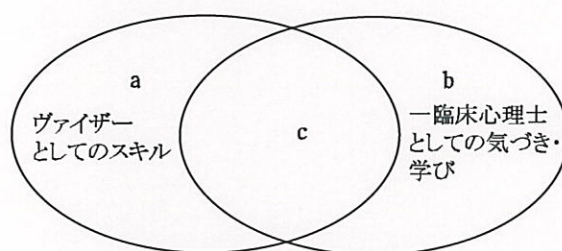


Figure 2 ヴァイザーの学び

2.3.4 OG/OBがヴァイザーであることに対する意識

(1) ヴァイザー側の意見

ヴァイザーが現場で働いている同じ大学院のOG/OBであることをどのように思うかについて、自由記述による回答を求めた。はじめに、得られた回答について、内容が肯定的であるか否かに焦点をあて、分類を行った結果、11名のうち9名が「肯定的内容」、1名は「不安」、残り1名は「その他」に該当する内容であった。なお、「不安」の内容は、全てのSVを外部のヴァイザーが担当する事には不安があるというものであり、OG/OB SV制度そのものへの不安ではなかった。次に、「肯定的内容」に分類された回答を整理した結果をTable 13に示す。ヴァイザーがOG/OBであることの肯定的側面として、①「親近感・安心感」、②「モデル形成」、③「現場の視点」が抽出された。さらに、10年後に機会があったら後輩にSVをしてみたいと思うかという質問に、自由記述による回答を求めた結果、9名にSVを希望する回答や前向きに検討する回答がみられた。理由としては、先輩のSVを受けて大変勉強になったので後輩につないでいきたい、OG/OBであるヴァイザーにとっても世話になったので自分も機会があればしたいといった、後輩に貢献する姿勢に基づくものや、SVを行うことは自身の成長にもつながる、色々なケースに触れたいといった、自身の成長を期待するものがみられ、OG/OBから

SVを受けた経験そのものが、モデル形成や将来へのモチベーションに繋がっていることがうかがえた。

(2) ヴァイザー側の意見

現場で働いているOG/OBが大学院の後輩のSVをすることについてどのように思うか、自由記述による回答を求めた。はじめに、得られた回答について、内容が肯定的であるか否かに焦点をあて、分類を行った結果、条件付きである場合も含めて6名のうち5名が「肯定的内容」、1名が「その他」に分類された。なお、「肯定的内容」に含まれていた条件には、OGの力量や相性を考慮して慎重なマッチングを求めることや、SVの質の検討などがあつた。次に、「肯定的内容」に分類された回答を整理した結果をTable 14に示す。OG/OBであることの肯定的側面として、①「親近感・安心感」、②「モデル形成」、③「現場の視点」、④「その他」が抽出され、①から③についてはヴァイザーの結果と同様の結果であった。この3側面は全てヴァイザーにとって利点となる側面であるといえるが、④「その他」では、大学院において縦のつながりができることや、OG/OBの自己研鑽の場になるという記述がみられ、組織に関係する者同士のネットワーク形成の視点やOG/OB自身にとっての利点があげられていた。

2.3.5 実施上の問題点

Table 13 ヴァイザーがOG/OBであることの肯定的側面（ヴァイザー側）

カテゴリー	記述内容
親近感・安心感	大学の校風やシステムを理解してくれているため、とても相談しやすかった／先輩なので率直に話ができる／親近感がわくし、生心研のシステムについても基本的に理解して頂いているので、安心感がもてる／親近感がわいた
モデル形成	同じ大学院の先輩が現場で活躍していることは、今後自分の将来を考える上でとても励みになる／現場で働いているOGと接することで、自身の将来像をより具体的に現実感のあるものとして考えることができる／自身の面接のことから、身近な課題である大学院修了（もしくはその後の進路）について話を聞きやすく、参考になった／自分の今後についての不安や焦りもある反面、ヴァイザーのように現場に出てたくさんの人に会い、色々な経験を積むことに期待をもつことができた
現場の視点	第一線で活躍している先輩方に教えていただけて、心強かった／現場での経験を生かしたアドバイスが頂けるので、とても勉強になる／現場を持って活躍されている点で、SVを受けられたことがとても有難かった／現場で働いているOGということが自分には大きな影響があつた。現場で多くのケースを持ったことがあるヴァイザーのアドバイスは、すぐに活用できるものばかりでとても勉強になった

Table 14 OG/OBがSVをすることの肯定的側面（ヴァイザー側）

カテゴリー	記述内容
親近感・安心感	先生方よりも近い存在であること／同じ場所で学んでいる仲間であるという意識がある／同じ環境にいたからこそ分かる部分がある
モデル形成	院生の近い目標になりうる存在として意味がある／将来のモデルになると思う
現場の視点	今の臨床現場の話も交えながら進めることができる／実際に現場で経験を積んでいる先輩であるということ／院生にとっては、現場での経験を活かしたアドバイスなどをもらえる機会
その他	大学院の卒業生の縦の繋がりができる／OGにとっても自己研鑽の場となる

(1) ヴァイジー側の意見

OG/OBとの連絡の取り方やケースを進める上で困ったことについて自由記述による回答を求めたところ、11名のうち3名は特に問題はないと回答していた。連絡の取り方とケースを進める上で困ったことのそれぞれについて、8名分の回答を詳しくみた結果、連絡の取り方が難しいと回答したのは1名のみであり、2名については、連絡手段をメールにしたことで問題なく連絡を取ることができたとの記述がみられた。ケースを進める上で困ったとしては、SVの日程調整が困難（6名）、SVに時間がかかる（1名）の2点があげられた。日程調整が困難な理由としては、ヴァイザーの予定と相談室の開室日時が合わない（2名）、ヴァイザーが多忙である（1名）、ケースの進み具合によってSVの日時が限られるので、ヴァイザーと予定を合わせづらい時がある（1名）、逐語記録の作成や他ケースとの兼ね合いを考えた上での日程調整が困難（1名）があげられ、①ヴァイザーの都合との兼ね合い、②SVを実施する部屋の予約、③担当ケースとの兼ね合いが日程調整を困難にしていた。SVに時間がかかる理由としては、逐語記録を事前に渡すことができず、SV当日に一から読み合わせをするためであることがあげられていた。

(2) ヴァイザー側の意見

院生との連絡の取り方やSVを進める上で困ったことについて自由記述による回答を求めたところ、6名のうち5名から不都合や問題と感じていることに関する回答が得られた。内容を詳しくみた結果、連絡の取り方に関する問題はなく、メールで連絡ができたので不都合がない（1名）との記述がみられた。SVを進める上で困ったこと

は、時間内に終わることができない（2名）、長期休暇中の相談室開室日を前もって知りたい（1名）、事前の資料が少なく、あまり準備ができないままSVを行うこととなり、難しさを感じた（1名）、大学や院生のニーズが明確でなかったため、何を求められているのか手探りでスタートした（1名）、どのような経緯で担当が決まったのかが不明で、どうして自分が担当になったか分からず不安だった。また、担当が決定する前に、打診として院生と日程が合うかどうかを聞いてもらえるとうよかった（1名）と、SVの所要時間等の現実的な問題から、SVの質に関わることまで多岐にわたっていた。

まとめ —OG/OB SV制度のシステム および意義の検討—

OG/OB SV制度は、本講座の臨床心理士養成システムにおける臨床実習に位置づけられている。実習は様々な配慮から構成され、仕組みが整えられてきており、段階を踏んで準備が整った者からケース担当をする流れとなっている。スーパーヴィジョンを受けるまでの準備として、一丸（2003）は、①知的学習：心理学全般についての基礎知識および臨床心理学の基礎的概論について学ぶこと、②実習：外部実習で臨床的雰囲気にも馴染み、内部実習機関ではどのような手続きで心理臨床が進められているか知ること。ロールプレイ、グループ体験をすること。③間接的学習：ケース・カンファレンスやインテーク陪席の3点をあげている。本学の臨床心理養成システムにおいて、きめ細かな配慮のもとに、これらは十分に満たされているといえる。さらにSVそのものにお

いても、段階を踏んだ教育上の配慮がなされており、OG/OBがSVを担当する段階では、SVに臨む姿勢においても準備が整った状態であるといえる。このようなシステム上の位置づけおよび準備段階があつてこそ機能するOG/OB SV制度であると考えられる。

次に、調査の結果から、OG/OB SVシステムの機能について、システム運営上の現実的問題とSVの質の2点から検討した後、OG/OB SV制度の意義について考察する。

システム運営上の現実的問題に関して、ヴァイジー・ヴァイザー間の連絡はメールの使用などにより、比較的スムーズに行われていた。ヴァイジー側は、SVの日程調整が困難であることが主な問題となっており、既に現在も行われていることだが、SV担当決め段階でヴァイザーとヴァイジーの予定についてよく確認することが必要と考えられる。またSV実施場所である相談室の予約が困難であることには、学内に併設された相談室であるという性質が大きく影響している。大学は年数回の長期休暇がある他、スタッフの雇用状況などにより限界はあるが、ヴァイザーとヴァイジーが年間の学事予定を把握し、見通しをたてながら進めることが状況改善の一助になると思われる。ヴァイザー側が困難を感じていることは多岐にわたっていたが、役割の不明確さや、担当の経緯が不明であることについては、年度始めに実施している説明会の場で説明されるため、ヴァイザー登録者の出席が望まれる。また、担当者を決定する際には、ヴァイザー候補に打診をした上で決定をしているが、より丁寧な連絡と内容が伝わりやすい工夫をすることも課題である。SV所要時間や事前情報の不足については、ケース関連の資料を事前に確認できることで改善が予想されるが、資料の扱い等、慎重な検討が必要である。

次に、SVの質について検討する。ヴァイジー側は、SV実施前の心境において、臨床的技法のアドバイスへの期待が高く、実際に大半の者が期待に添ったSVが行われたと感じていた。ヴァイザーは常に臨床的技法の研鑽に励むことが必要とされよう。SV実施後はケース理解が進み、SV実施前の段階では期待の比重が低かった情緒的サポートについても、実施前に期待した以上の効果が得られていた。初学者の心理的状況に不安、不

安定感（篠原，2010）が特徴として含まれていることから、情緒的サポートは必須と考えられ、また、一丸（2003）、小早川（2006）も初学者に対する情緒的サポートの必要性に言及している。さらに、SVを受けて勉強になった点として抽出された①「技法」、②「ケース理解」、③「自己理解」、④「モデル形成」のうち、①から③は平木（2003）による「SVの目的」に含まれている。また、④にはヴァイザーとのコミュニケーション自体が良き手本になったとの回答が含まれていたが、平木（2005）は、ヴァイザーとのやり取りはケースの検討にも増して重要なものと位置づけ、ヴァイジーはヴァイザーとの実際のやり取りの中で支援的コミュニケーションのモデルを体験し、有効なかかわりを体得していくと述べている。

また、SVの質において常に問われるのはヴァイザーの力量であろう。本講座が定めた登録条件に該当するOG/OBが登録者となるが、登録者の大半が、自分の臨床経験を生かせることを登録理由としていた。OG/OBが大学院修了後に臨床経験を積み、臨床心理士としての成長を実感しているといえ、そこに至るまでの本学における教育システムの効果も感じられるところである。SV実施前の心境では、臨床的技法および情緒的サポートについて大半の者が可能であると考えており、ある程度の自信を持つ者が登録者となっている事実もSVの質を保つことに繋がっている。SV実施後の意識については、ヴァイジー本人よりもケースに焦点をあてたSVが実施されたことが示され、SVは、ヴァイジーに臨床的技法を教育・訓練していく（一丸，2003）ものであるという基本姿勢が守られていた。また全体的に、情緒的サポートは可能であったが、臨床的技法やヴァイザーとしての役割の達成については疑問視されており、自分達がSVを受けてきたヴァイザーのイメージはあるものの、ヴァイザーの役割として必要なことをシステマティックに学んでいないことが影響しているものと考えられる。また、ヴァイザーは、ヴァイザー経験から、ヴァイザーとしてのスキルに関する学びと、一臨床心理士としての気づき・学びを体験しており、これらが相互に作用することにより、臨床心理士としての成長に影響を及ぼしていた。このサイクルは結果としてSVの質に還元され、質の向上につながると考え

られる。以上より、本学のOG/OB SVでは、SVに必要とされる基本的かつ一定水準の質が保たれていると考えられる。

最後に、OG/OB SV制度の意義について検討する。登録者であるヴァイザー全員に後輩支援という登録動機があり、OG/OBならではの思いに支えられているシステムであるといえる。支援という動機をもつ一方で、ヴァイザーは自らも学び、SVは自己研鑽の場になっていた。教育には、学ぶ者によって育てられるという要素があるが、心理臨床におけるSVの場合、その傾向は顕著（滝口、2005）とされており、OG/OB SVにおいても同様のことが生じていると考えられる。また、登録者は育児期間中や非常勤勤務のOG/OBが中心となっていたが、相談室の開室時間が昼間の時間帯であることが主な理由となっている。育児期間中の女性は、時間的な制限から現実問題として勤務が困難になる場合が多いと思われるが、ヴァイザーとしての勤務は比較的時間の調整が可能であるため従事しやすく、育児期間中のOG/OBの研鑽の機会になると考えられる。つまり、大学院修了後のOG/OBへの支援の場にもなっているといえよう。なお、本講座におけるOG/OB支援の場としては、「学校臨床に関わる事例検討会」も実施されており、同様にOG/OBの自己研鑽の場になっている。

SV実施前のヴァイジーの中には、ヴァイザーが初対面であることへの不安がある者もいたが、同時に大半の者が、先輩であることの安心感をもっており、実際SVを実施したところ、特に問題は生じなかった。対人場面において、初対面の不安や緊張が生じるのはある程度自然なことであり、その後、SVが機能し、目的を達成することが重要と考えられる。そこで、教員と違って評価をされることなく、同じ大学院の先輩でもある者がヴァイザーになることは初対面の不安を和らげ、より安心感をもってSVに臨むことにつながると考えられる。このことは、将来的に自らがSVを受ける前段階に位置づけられ、SVを受ける練習になっていると考えられる。

評価をされることなく、安心感があるとはいえ、SV実施前のヴァイジーのSVに対する姿勢や心構えは教員による1回目のSVと変わることなく、なおかつ積極的にSVに臨む姿勢があった。

実際にSVを受ける段階では、ヴァイザーが外部の者であることを考慮した配慮や、より合理的・効果的にSVを受けるための工夫、現場における視点を学びとろうとする姿勢が新たにみられた。SVにはシステムとして与えられたSVと自身で学んでいくもの（河合・成瀬・藤原、2005）があり、システムの中でSVを受けることは受け身になりがちと考えられるが、調査の結果から、ヴァイジーがケースに関する問題意識を持ち、積極的・自主的にSVに臨む姿勢が示された。ヴァイザーであるOG/OBが外部の者であるという性質が、自主性を育てていると推察される。

OG/OBがヴァイザーであることの肯定的側面として、ヴァイジーとヴァイザーに①親近感・安心感、②モデル形成、③現場の視点といった共通のカテゴリーがみられたことは興味深いことであった。②モデル形成はOG/OBに限らず、一般的にSVでみられることだが、同じ大学院の先輩という身近なモデルであることが、よりモデル形成を促進すると考えられる。また、ヴァイジーの多くが、将来後輩にSVをすることに前向きであり、後輩支援の動機をもつOG/OBからSVを受けた経験そのものが、未来の後輩への価値の伝達・継承の姿勢を形成し、OG/OBの回答にみられた「縦のつながり」になっていくと考えられる。なお、モデル形成に関連するものとして、本講座では臨床心理基礎実習Ⅱ（修士課程1年次後期）の授業内で「臨床現場で働くOGと語る会」を実施し、教育、医療、福祉等の領域に勤務するOG/OBから生の声をきく機会を設けている。③現場の視点は、ヴァイザーがOG/OBであることに限らず得ることができるが、大学という機関において、教員は研究者であり、教育・研究指導が主な活動になっている。そのため、比較的ヴァイジーと年が近く、現場で経験を積んでいるOG/OBのSVは、院生にとって有意義であると考えられる。

以上、既存のSVシステムの間中に位置する本学独自のOG/OB SV制度のシステムの検証とOG/OBがSVを行うことの意義について検討してきた結果、制度が目的とする在籍生の力量形成は一定の水準で達成されているといえ、OG/OBの専門性向上にもつながっていた。システム運営上に基本的な問題はないものの、明確となった改善点や、より詳細なSVの質について検討が必要と考

えられ、OG/OBSV制度のさらなる充実がのぞまれるところである。

引用文献

- 江口昇勇 (2010). 分科会B「スーパービジョンのあり方」報告 スーパービジョンのあり方をめぐって. 日本臨床心理士養成大学院協議会報, 6 (2), 10.
- 平木典子 (2005). 臨床心理実習とスーパービジョン 藤原勝紀 (編) 臨床心理スーパービジョン. 至文堂. pp.49-57.
- 一丸藤太郎 (2003). 臨床心理実習1—スーパービジョン 下山晴彦 (編) 臨床心理実習論. 誠信書房. pp.326-367.
- 河合隼雄・成瀬悟策・藤原勝紀 (2005). 臨床心理スーパービジョンをめぐって—その現在・過去・未来 藤原勝紀 (編) 臨床心理スーパービジョン. 至文堂. pp.9-39.
- 小早川久美子 (2006). 臨床心理士養成指定大学院におけるスーパービジョンシステム—その教育効果と課題—. 広島文教女子大学心理教育相談センター年報, 14・15, 3-14.
- 佐藤昌子・木村あやの・藤崎春代 (2010). 大学附属の心理相談室における知能検査を核としたアセスメントシステム—ウエクスラー式知能検査を活用した心理臨床活動における臨床心理養成—. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 12, 25-33.
- 篠原恵美 (2010). わが国における初学者へのスーパービジョンについての展望, 28, 358-367.
- 昭和女子大学大学院生活機構研究科心理学専攻臨床心理学講座 (2010). 昭和女子大学大学院生活機構研究科心理学専攻臨床心理学講座実習必携 (未刊行)
- 田口香代子・佐藤昌子 (2009). 大学附属の心理相談室が地域の心理援助に果たす役割—昭和女子大学生生活心理研究所心理臨床相談室の場合—. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 11, 25-36.
- 滝口俊子 (2005). スーパービジョン体制を考える 藤原勝紀 (編) 臨床心理スーパービジョン. 至文堂. pp.269-274.
- 鶴養啓子・藤崎春代・島谷まき子・渡邊佳明・山崎洋史・松永しのぶ・田中奈緒子・木村あやの (2010). 試行カウンセリング実習の可能性と考慮点の実証的検討①—体験についての予備調査. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 12, 1-12.
- 米倉五郎 (2009). 分科会B「スーパービジョンのあり方」報告 当大学院教育におけるスーパービジョンについて. 日本臨床心理士養成大学院協議会報, 11, 11.
- 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 (2009). 平成21年度版 臨床心理士関係例規集, pp.30-31.

謝辞

本論文の作成にあたり、お忙しい中、調査にご協力下さった在籍生とOGの皆様から感謝申し上げます。また、貴重なご指摘とご助言を頂いた藤崎春代先生に厚く御礼申し上げます。

(たぐち かよこ 昭和女子大学生生活心理研究所)
(きむら あやの 昭和女子大学生生活心理研究所)

スーパーヴィジョン (SV) を受けるにあたって

1 担当ケースとスーパーヴァイザーの決定連絡を受けたら、スーパーヴァイザーの先生に事前に挨拶し、連絡可能な方法、スーパーヴィジョンの可能な曜日、部屋の確保が必要かを確認しておく。また、初回ケース前の事前 SV の実施日時を相談して決める。スーパーヴァイザーの先生の予定に合わせ、授業・外部実習以外の自分の予定は、調整すること。

2 事前 SV の準備をする

- ・生心研に保管してあるインテーク資料を借りて、自分なりの見立てや疑問を A4 用紙 1 枚程度にまとめておく（資料は借りたその日中に返すのが原則。時間の都合でそれができない場合は、生心研に相談。）
- ・SV を受ける部屋を確保する（事前に SV の先生に部屋の確保の必要があるかどうかを確認する。必要な場合は、心理学科教授室か生活心理研究所で空き部屋状況を確認して予約する）
- ・SV 当日に生心研でインテーク資料を借りる（当日に借りられない事情がある場合は事前に借りておき、院生室のカギのかかるロッカーで保管。「ケースを担当するにあたっての注意事項」参照）。

～～ 1 回目のケース ～～

3 1 回目のケースが終わったら、すぐにスーパーヴァイザーの先生に SV のお願いをする。次回のケースの前までに SV を受けること。

[SV の事前準備]

- ・SV を受ける前までに、ケースの逐語録・資料を作成する。逐語録・資料の作成と保管については、「ケースを担当するにあたっての注意事項」（資料 9）を熟読すること！
- ・SV を受ける部屋を確保する（事前に SV の先生に部屋の確保の必要があるかどうかを確認する。必要な場合は、心理学科教授室か生活心理研究所で空き部屋状況を確認して予約する）

[SV 当日の準備]

- ・生心研で、保管してある、逐語録・資料などを借りる。（SV 当日に借りて、その日中に返すのが原則。当日に借りられない事情がある場合は事前に借りておき、院生室のカギのかかるロッカーで保管。「ケースを担当するにあたっての注意事項」（資料 9）参照）
- ・カウンセリング中の音声や、DVD 映像を SV で再生できるように心理学科教授室でノートパソコンを借りる。

[SV が終わったら]

- ・ノートパソコンを使ったら、データを残していないか、DVD や USB を取り出し忘れていないか、確認すること！
- ・逐語録・資料・DVD・USBなどを速やかに生心研に返却する。

～～ 2 回目のケース ～～

4 基本的に 3 を繰り返す。スーパーヴァイザーの先生の指示に従って、必要なものを準備する。